



ドラガン・パーボヴィッチ（1954年、ニーシェ生まれ）、ステップス二年振り二度目の個展である。今回は《life is beautiful》と題してセルビアの海に遊ぶ者達の幸福を瞬時に撮影した作品を発表した。

今回は《LIFEBETWEEN IS GOING ON》シリーズである。ステップスオーナー吉岡によると、「LIFEBETWEEN」の英語は造語であり、セルビア語に見合った英語がなかったためだと説明している。

吉岡は展評をブログで公開している。「絵のような写真」とし、「少ないシャッターチャンスを生かして時間と戦いながら撮影しているにもかかわらず、その画面は不思議に静寂に包まれて、穏やかな表情を見せるのである。」

ドラガンの特徴を「テクスチャーにある」とし、「写真には質感というものは乏しく、イメージだけが紙の上に定着されている。（中略・引用者）パーボヴィッチの写真には不思議な質感があるのである。」

「テクスチャーがもたらす効果は絶大で、われわれに画面を注視させて、目が離せなくなるのである。それは写真のイメージを超えて、実在のモノとしての画面を現出させて、写真を絵画に変化させるのである。」

優れた考察である。テクスチャーを創りたい写真家は、和紙を用いる等素材を変化させるが、ドラガンはそうしない。

その違いを、吉岡は見抜いていることになる。無論、これまで写真と絵画の類似と相違は多く語られ、研究されてきた。私もまた、今回の作品群に絵画性を強く感じる。吉岡とは異なる見解を考えてみる。

まず、なぜ絵画に見えて写真らしくないのかを考察する。ひとつは構図であろう。写真の構図ではなく、絵画の構図だ。そして対象はリアリティに映されるのではなく、正に近代絵画のように「描かれている」ように見える。

この「近代絵画」に相似することに、私は着目する。近世まで神のために描かれた世界を、近代絵画は卑近で身近な存在を描き出した。それまで粉本＝見本を使用していたのを止めて、野外や都市に出て、スケッチしたのだ。

その他愛のない時間＝LIFEBETWEENの瞬間を切り取り、どれだけ楽しくとも苦しくとも人生は続いていく＝GOING ONことを作品にしたのではないかと私は感じる。ちっぽけな出来事や存在にこそ意義があるのである。

このような作品を、吉岡は丁寧に展示した。写真でもあり、絵画でもある。写真でも絵画でもない。では何か。ギャラリーの扉に立つと、私は崇高な印象を受けて、入るのにたじろいだ。崇高とは、権威ではなく緊張感だ。

優れた作品はその本質を見抜かれ、着実に展示されることが望まれる。今回は、その素晴らしい一例でもあった。

